

第5回特定秘密漏えい事案等に係る再発防止策に関する有識者会議 (議事概要)

1 日 時 令和7年8月6日(水) 09:30～17:30

2 場 所 航空自衛隊入間基地

3 出席者

有識者(敬称略)

黒江 哲郎(座長)、只木 誠(座長代理)、池田 陽子、関谷 純平、
高橋 秀雄

防衛省側

(内部部局)

防衛政策局次長、秘密制度監察官(公文書監理官)、防衛政策局調査課長、
大臣官房参事官、同情報保全企画室長ほか

(航空自衛隊)

航空幕僚監部運用支援・情報部長、同情報課情報保全室長、中部航空方面隊
司令官、同副司令官、中部航空警戒管制団司令、同副司令、中部航空警戒管
制団中部防空管制群司令、第2輸送航空隊第402飛行隊長ほか

4 議事内容

- ・ 航空自衛隊における再発防止策について説明
- ・ 中部航空警戒管制団中部防空管制群及び第2輸送航空隊第402飛行隊の視察を行い、現場部隊の情報保全の取組を確認

5 各有識者からの主な意見

(1) 部隊視察全般について

- ・ (入間基地は航空自衛隊で一番女性が所属している割合が多い基地である旨の説明を受け、) 基地内には、女性の姿も多く、たくさんの女性隊員の方が、男女の差に関係なく活躍されていることを伺い、将来のためにも、素晴らしいことだと感じた。
- ・ 防空指令所(以下「DC」)及び輸送機の見学、領空侵犯に対する措置や各地に多数設けられたレーダーサイトの運営についての説明などを通じて、わが国の空が、今どのような状況におかれているのか、航空自衛隊の皆様が24時間、常に警戒監視を行い、対応されていることに対し、深く敬意を表する。

- ・ C-2輸送機は近年の国外における任務でも活躍しており、新型機の導入により作戦能力が向上するとともに、乗員の勤務環境も改善されたことを理解した。研修時、コックピット内の一部計器には保全措置が施されており、研修者受け入れ時の保全手順が厳格に履行されていることを確認した。

(2) 情報保全の取組と今後の課題について

- ・ 現場指揮官の意識の高さは、保全体制の根幹を支える重要な要素であると認識した。
- ・ 中部航空警戒管制団隷下には、僻地に所在する分屯基地が複数存在し、少数の隊員が厳しい勤務環境下において秘匿性の高い情報を日常的に取り扱っている実情を理解した。人的資源の制約下においても、高度な保全意識と運用体制が維持されている点は高く評価される。
- ・ 入間基地内の各部署を視察し、秘密保全の意識、体制が行き届いていると感じた。重大な事故・インシデントは回避しなければならないので、早期発見の体制を普段からチェックしていくことが重要だと思われる。
- ・ DC等の立入制限区画が適切に運用され、立入許可により秘密情報を管理するという手法が有効に機能しており、当面の再発防止措置がしっかりと実施されていることが確認できた。
- ・ 秘密情報の管理が業務区画や業務内容により明確に区分されており、重要度の高い情報については、DC内、専用システム上でのみ取り扱う運用が徹底されており、ヒューマンエラーによる深刻な漏えいが発生しにくい体制が整備されていると評価でき、これまでの視察及び事前のブリーフィングを通じて、悪質な情報漏えいや、防衛政策に影響を与えるレベルの情報流出は確認されておらず、現行の管理体制は適切に機能していると考えられる。
- ・ システムの改修・更新は、費用が掛かるが、この数年、公共部門においても急速に進展しており、そのような科学技術の進歩の恩恵をも十分に生かして、合理的で有効な情報保全措置を推進していただきたい。
- ・ DC勤務の隊員は、全員が適性評価を受けることとなっており、これは潜水艦部隊と同様に、組織内手続の瑕疵による漏えいリスクを低減する有効な手段であると評価できる。
- ・ 新隊員については、適性評価を経るまで特定秘密に関わる業務には従事できず、その他の業務に従事することとなるため、部隊からは、実施期間の短縮による隊員の早期戦力化を望む声も聞かれた。これは、保全体制の強化と作戦運用のニーズの両立を図る上で、今後の制度改善の検討課題と思われる。
- ・ 適性評価について、防衛省と同じ大臣の下にある外局たる防衛装備庁との間の異動について適性評価をやり直すべき実質的な理由、実益がどこにあるのか

は、制度の運用実績が積み重なった現時点においてよくよく整理してもよいのではないか。

- 他方、適性評価の5年という期間が適切か、借財の急増などに対応可能かなど、この点も制度の運用実績を踏まえてよく検証すべきである。

(以上)